

読者の広場

立岩真也氏の書評について

立岩真也氏による拙著の書評（9月号）を読んだ。気になったのは、次の文章に窺える氏の構えである。私は障害者や病者の生き方を記した著作から学び、それを拙著『近代日本とマイノリティの（生）政治学』に反映させようとした。だが、氏は「小畑の著書」の構図の中にこれらが置かれてよいことがあったと思えない」と言う。ここからは、それらの著作について唯一の正しい読みや学びができる立岩氏が、誤った読みや学びしかできないために全く価値のない書物を刊行した小畑を審判するという構えが確認される。

（京都府、小畑清剛、姫路獨協大学教授／
京都大学法学博士）

慰安婦問題には慎重な対応を

9月号の特集「歴史学と現実政治」を読んだ。なかでも今、大きな社会問題となっている「慰安婦」問題についての関口すみ子・法政大学教授の論考は、熱くなっている日本の一部マスコミに対して警鐘を鳴らしている。傾聴に値しよう。

確かに、この問題に関して日本政府に公的な謝罪を求める決議案が日本の最大の同盟国であるアメリカの下院外交委員会において圧倒的多数の賛成で可決されたことはショックであるし、なぜこの時期に……とも思う。しかもアメリカは、慰安婦問題の直接の当事者ではない。だからならんかの「政治的意図」が働いているのではないかという疑念もある。

しかし関口教授の論考によると、慰安婦問題の理解は近代の「公娼制」さらには江戸の遊女・遊郭への理解、すなわち「伝統」をどうみるかという問題とも関連している……とある。私もその通りだと思う。アメリカでは人権についての世論が厳しく、と

一冊の著作は多様な読みを許容し、異なる読者は様々なことを学びうると信じていた私は驚いた。氏は私の読みと学びを拒絶し、拙著がもつ意義を否定される。私が内閉や切断という少数者が陥りがちな精神の歪みを強調したことに氏は反発されたのかもしれない。別著に記したように、この歪んだ生の形式は子どもの頃に私自身が選択したものであった。先天性身体障害者である私は、知的障害児を切断することによってイジメに耐えてきたという幼児体験をもつ弱くて愚かな人間である。しかし誰にも弱くて愚かな部分があるのではないか。弱くて愚かな部分があるからこそ人間なのではないか。

勿論、例えばハンセン病患者を内閉に追い込んだのは、らい予防法Ⅱ悪法を制定した国家権力である。だが、「国家権力が悪い」で問題が片づかないことは自明である。「複合差別をもたらず多数者の偏見や国家権力が悪い」ことを前提に、少数者がどのような困難な状況に置かれたかを人間学的観点から分析を試みたのが拙著である。氏と異なり、樋口陽一氏のように「知らなかったことが多く勉強になった」と言って下さる方も多い。また拙著を軸に講義を行った法学部や薬学

りわけ「抑圧された女性の人権」についての批判は鋭い。つまり、軍の命令があったかどうか云々の問題ではなく、「人権抑圧」の問題として慰安婦問題を拉致問題と同様に扱おうとしているのだ。

ところが一部マスコミは、強引に事実の列挙とその有無を論争の焦点に挙げ、世論を醸成しようとしているかに見える。これはあまり得策ではあるまい。確かに提起された個々の論点を検討することは必要である。しかし関口教授が指摘するように、責任逃れのためのような「事実」の列挙は、かえってひんしゆくを買うだけであり、国は慎重に対処すべきだ。

（京都府、伊藤俊春、74歳自営）

自民党の良識派に期待する

9月号の「追悼 宮澤喜一」がよかった。参院選は自民党が惨敗するも、安倍首相は引き続き政権を担当すると素早い表明を行った。政局は不透明なので今後どうなるかは予断を許さない。

三木武夫氏とその妻・睦子さんとの有名な会話がある。自民党の批判を繰り返す三木氏に、睦子さんが「そんなに嫌な自民党

部の一回生も同様の感想を述べてくれる。

大学院で勉強を開始した頃、私は先輩から「部落、在日、被爆者、水俣、ハンセン病とかかわるなよ。堅気の研究者と見なされなくなるぞ」という忠告を受けた。この忠告は長尾龍一氏がトランク法哲学（トランク）につめて持ち帰った外国の思想を日本で急ぎ紹介する営み」と特徴づけた日本の知的風土の下で、少数者の生の現実から出発する研究がマトモな法哲学として認められないことを物語る。拙著はその知的風土へ異議を申し立てつつ、ロールズなどの思想の研究を行っている若き研究者達が現実と真正面から向きあうよう促したものである。

だが、立岩氏の書評は、「やはり現実とかかわるのは恐ろしい」という萎縮効果を彼らに与え、思想と現実のすり合わせを試みる気持ちを失わせることになる。氏の専攻する社会学と異なり、法の分野は現実への知の越境が厳しく禁止されている。法科大学院が開始したこともあり、知の専門化・技術化が高まり人間疎外をますます進めつつある。トランク法哲学の現状を打ち破る私の闘いに、立岩氏も参加されるよう呼びかけたい。

ならさつさと党を出たらどう？」と言うと、三木氏は「自民党の中にいるから改革できる。自民党を出たら多くの理想は現実化しない」と答えたというのだ。三木氏、宇都宮徳馬氏ら、自民党にも軍縮平和を希求した政治家は多くいた。宮澤氏がリベラルな石橋湛山氏を尊敬していたことも、特集で明らかにされていた。

安倍首相は祖父の岸信介氏を尊敬している。しかし安倍首相の父・晋太郎氏の実父で、安倍首相の「もうひとりの祖父」である安倍寛氏は、戦時中も大政翼賛会と一線を画した合理主義者で、石橋氏とも懇意だったと聞く。自民党の退潮は著しいが、加藤紘一、河野洋平両氏のような政治的センスをもつ政治家もいる。党内で沈黙している良識ある政治家の今後の闘いに期待する。いまこそ自由民主主義者の最大の活躍が求められているのではあるまいか。

（神奈川県、櫻井智志、55歳社会思想史研究者）

お知らせ

記事への感想や意見をお寄せください。600字前後。採否の問い合わせはご遠慮ください。締め切りは9月15日です。